

家族の財布は誰のもの？

家族の財布をにぎるのは誰ですか

家族は私たちにとって最も身近な集団です。人間は生まれたときからすでに家族の一員ですし、大人になって自立した後も結婚すれば家族という集団を新たに作るようになります。

でも集団と聞いて真っ先に思い浮かぶのは、会社などの組織ではないでしょうか。一般には法人と呼ばれることもあります。こうした集団は何らかの目的を持って活動しているのが普通です。

たとえば、営利企業であれば、利益を上げ、会社の価値を高めることが第一の目的となります。また、宗教法人であれば、教義を広めて信者を増やし、信仰を深めるのが目的でしょう。さらに、病院の目的は患者の病気を治すことであり、学校の目的は子どもたちの総合的な能力を高めることです。

今号から装いも新たに、慶應義塾大学商学部教授の中島隆信先生の連載エッセイが始まります。難解なイメージがある経済学ですが、このエッセイでは暮らしに身近な話題をテーマとして取り上げます。第1回は家族のあり方の移りかわりとその行方です。お楽しみください。

つまり集団には必ず目的というものがあります。

そして、集団の目的を明確にし、その達成に向かってメンバーの力を結集するように集団を統治することをガバナンスといいます。ガバナンスに不備がある集団は、メンバーがバラバラで「糸の切れた凧」の状態となります。こうした集団はパフォーマンスが悪化するか、不祥事を起こしがちとなり、最悪の場合は、倒産ないし解散という事態を招きます。

これから始まるこの連載の第1回は、家族を集団としてとらえたときのガバナンスの問題について考えてみたいと思います。

誰が家族をまとめるのですか

まず、話を分かりやすくするために単身世帯を考えてみましょう。

単身世帯にはガバナンスの問題は存在しません。



中島 隆信 なかじま たかのぶ

経済学者。慶應義塾大学商学部教授。専門は応用経済学。1960年生まれ。83年慶應義塾大学経済学部卒業、01年同大学博士号(商学)取得。01～07年7月、09年～慶應義塾大学商学部教授、07～09年3月内閣府大臣官房統計委員会担当室長。

寺、障害者、「オバサン」、刑務所といった、経済学とは一見縁遠いと思われる対象を、経済学の視点から一般向けに論じた著書多数。また、「大相撲の経済学」を著すなど大相撲にも造詣が深く、大相撲野球賭博問題を契機として設置された日本相撲協会「ガバナンスの整備に関する独立委員会」の委員に就任し、副座長として年寄名跡の売買禁止などを内容とする相撲協会改革案についての意見書を取りまとめている。

なぜなら、家族は一人だけなので、すべてを自分で決め、自分で実行するからです。ご飯も風呂も掃除も自分がしたいときにすればいいのです。働いて得たお金も自分の好きなように使ったり貯めたりすることができます。ところが、結婚して家族が二人になったとたん、家族としての意思決定が必要になつてきます。誰が働くのか、収入をどう配分するのか、誰が家事をするのか、すべて二人で決める必要があります。さらに子どもが産まれると、子育てをどう分担するかという問題も発生します。子どもが大きくなれば、子ども部屋をどうするか、子どもにも携帯電話を持たせるか、子どもの小遣いはいくらにするかなども決めなければなりません。

このとき家族全員の意見が一致すれば何の問題もないでしょうが、もし家族内で意見が食い違ったときには誰かが最終決断を下し、かつ結果についても責任も負うこととなります。株主総会や取締役会を持つ株式会社とは違い、家族には意思決定プロセスについて特に決まりがあるわけではありません。家族が置かれた環境によって意思決定の方法も変わってきます。

家業がある家庭

さて、家業を営んでいる家庭が日本に多く見られた時代、家族の意思決定は比較的容易だったと推察されます。なぜなら、少なくとも家業の継続という点で家族全員の意見が一致していると思われるからです。

繁忙期には、家族総出で家業の手伝いをしたこと

でしょう。家業からの収入によって生計を立てており、かつ家族の協力度合いによって収入に影響が出るのであれば、家業のために個人の都合がある程度犠牲にするのは当然といえます。

こうした家庭では父親に権限を集中させる家父長制をとるのが合理的だったともいえるでしょう。なぜなら、家業は長男によつて継承されるという暗黙のルールを設けることが相続に関わる揉め事を減らし、家業のノウハウの効率的な蓄積を促進するからです。さらに、リーダーの存在が明確になるため意思決定も容易です。

専業主婦がいる家庭

産業が発達してくると家庭の収入源も家業ではなく企業に移っていきます。主たる稼ぎ手の夫は企業戦士として家庭の外での仕事に没頭し、妻は専業主婦として家事と育児に専念するようになってきます。いわゆる良妻賢母が理想とされた時代です。

炊事、洗濯、掃除といった家事は生活そのものから、そうしたサービスを独占的に供給する主婦の家庭内の発言力は強まっていきます。さらに、仕事に忙しい夫は妻に財布を渡し、家計の切り盛りも任せます。その結果、マイホーム購入や子どもの私立学校進学などを理由に夫の小遣いが減らされることもあります。家族旅行の計画を立てる際も、家計を把握している妻の意見が重視されるでしょう。

このことは家族のガバナンスの権限が夫から妻に移ることを意味します。お金の配分を決める人が強

連載エッセイ | 経済学的思考のススメ

第1回

家族の財布は誰のもの？

い力を持つのはこの世界も一緒です。

近代化が家族にもたらしたもの

家族のガバナンスを容易にするにはメンバー間で意思疎通を図っておく必要があります。つまり、普段から話し合いを通じて価値観が共有されていれば意思決定の際にも意見がまとまりやすいということです。

そのために重要な役割を果たすのが一家団欒です。しかし、この家族全員が顔を揃える機会は、家庭に導入された近代技術によつて大きな影響を受けてきました。

たとえば、電子レンジという家電がありますが、これは家族の食事形態に革命的变化をもたらしました。つまり、作り置きのお食事も簡単に温められるようになったため、必ずしも家族全員が同じ時間に食事をする必要はなくなりました。風呂の追い焚き機能もこれと同じ効果を持っています。

かつて音楽は家族揃つてテレビやラジオから流れてくるメロディを聞くものでした。それが大衆歌謡を生み、紅白歌合戦は一家団欒の象徴でした。ところが、1980年代に急速に普及したポータブルオーディオプレーヤーはそうした習慣を一変させました。音楽は持ち歩き、個人で楽しむものとなったのです。家族全員が同じ曲を知っているという時代は過去のものとなりました。

こうした現象に拍車をかけたのが携帯電話の登場です。一家に一台の固定電話の時代、家族はお互いに誰から誰宛てに電話がかかってきたかを何とな

く把握していました。ところが、携帯電話の導入によつてコミュニケーション手段が個人化されたため、家族の交友関係などの情報はプライバシーとして隠されるようになりました。

近代技術は確かに家庭生活を格段に便利なものとなりました。しかし、その代償として、私たちは少なくとも家族がまとまって行動することの意義も失ってしまったのです。

家族の財布はいくつありますか？

『男女共同参画白書』（内閣府）によれば、1990年頃から夫婦共働き世帯の数が専業主婦世帯の数を上回る状態で推移してきています。また、橋木俊詔、迫田さやか著『夫婦格差社会』（中公新書）は、夫の収入が多いことを理由に妻が仕事を辞めるケースが近年減ってきていると指摘しています。

かつての共働き世帯では、夫が主たる稼ぎ手で妻はパートタイムなどをして配偶者控除の範囲内で家計を助けるという形が主流でした。ところが最近では、女性の社会進出が活発化する一方、景気低迷の影響で男性の賃金が伸び悩んだことから、夫婦の収入の差は縮小する傾向にあります。

こうなると、夫と妻それぞれの収入をどう扱うかという問題が発生します。単純に合算し、財布を共通化するのが一般的と思われる方は多いでしょう。夫婦の価値観がほぼ一致していればこれで構わないと思いますが、夫と妻がそれぞれ個別の趣味を持ち、そのために一定のお金を使いたいときには、こ

の合算方式は摩擦を引き起こすかもしれません。「なんであなたはそんなことのためにお金を使うの？」と文句が出そうです。

さらに経済的に自立している妻は、夫の言うことなら何でも素直に従うとは限りません。あまりに理不尽な要求ばかりする夫には、レッドカードを突きつけることもできるわけです。意見の不一致や時間的なすれ違いなどが原因で離婚に至ることも考えられます。この点は、芸能人夫婦のニュース記事を見れば容易に察しがつきますね。

これからの家族は？

このように家族のメンバーそれぞれが独自の価値観を持ち、個人としてのプライバシーが守られ、そして経済的な自立に向かえば、家族としての結束力が弱まるのは当然です。夫や親の強いリーダーシップで家族を統率するという従来型のガバナンス体制ではうまくいかななくなってきたのです。

この問題に対処する方法のひとつは、家族のルールを明確化することです。私の知っているある夫婦は、共通の財布と個別の財布に分けて財産を管理しています。それぞれが決められた額を共通の財布に拠出し、子どもの養育費、家賃、家族旅行の費用、そして貯金などに充てます。残りは各自が個人的な娯楽や趣味のために使うというわけです。確かにこうした方が後ろめたさを感じることもなく好きなゴルフなどにも行けますね。はじめから個人の財布を分けているので、万が一の離婚のときに

家族の財布は誰のもの？

も対処が容易です。

もつとも、こうしたやり方があまりにドライで好かないという人向けには、家族としての理念を確立させるといふ方法もあります。何のために一緒に住み、家族を構成しているのか原点に立ち返って考えてみるのです。

家族を結びつけているのは血縁だと考えている人は多いと思います。でもそもそも夫婦は血縁ではありませんし、血のつながっていない子どもの養父母や里親になったりする夫婦もあります。逆に、日本の殺人事件の5割以上が親族間で起きているという事実もあります。

私は、家族の原点は人間が生きていく上で最も必要とされる信頼関係の構築を学び、実践する場だと考えています。信頼ほど私たちの心を安定させてくれるものではありません。信頼していれば余計な心配や詮索をする必要もありません。逆に信頼されたいれば責任感と勇気を持って行動できます。

世の中が変われば家族のあり方も変わって当然です。「昔は良かった」と懐古するのも結構ですが、時計の針を戻すことはできません。だったら、今の時代に合った家族像を考える必要があります。

現在、若者の間で「結婚は面倒くさい」という意識が広まっているようです。心から信頼できる人と一緒に家族という集団を作る喜び、そして子どもの成長を信頼して見守ることのできる喜びを味わうことが人生にとっていかに貴重な体験か、私たちは再認識するときにはきいていくのではないでしょうか。